

## 曹禺初期創作におけるキリスト教の影響

姜 小凌

キリスト教が中国現代文学に与えた影響は非常に大きい。周知の如く、キリスト教と関連を持っている著名な現代作家として、周作人（1885-1967）、徐志摩（1897-1931）、謝冰心（1900-1999）、許地山（1893-1941）、凌叔華（1900-1990）、林語堂（1895-1976）、梁実秋（1903-1987）、老舍（1899-1966）、巴金（1904-）等が挙げられる。「五四」文学の主張である「平等、博愛、自由」というテーマはキリスト教の主旨である人文主義から示唆を受けていた。

冰心は小学校、中学校および大学を完全に教会学校で過ごしたのである。キリスト教の学校——貝満中学校（北京）で自分の受けた教育に関して冰心はこのように述べている。

この学校で使ったテキストはすべてキリスト教関係により編集されるものであった。

（中略）『聖書』を勉強して、「福音書」から私はイエスという「人」を知った。（中略）

「愛人如己」（自分を愛するように他人を愛する）の思想を伝えるために残酷に十字架に打ちつけられた。この形象を尊敬に値すべきである。<sup>1)</sup>

老舍は中学時代から宗教慈善事業に強い関心を持っていた。教会の牧師も担当したことがある老舍は「現在、中国にはダンテのような人が必要だ。霊の文学から着手し、良心の門を開けて、人々に霊の生活を送らせる。皆良心を持つようになる。かならずしも迷信というわけでない。中国で霊の文学と霊の生活を推進したいと思って、普通の人は容易にできないのである。」と語っている。<sup>2)</sup>

巴金は文学創作を始めたばかりの時、「『聖書』を熟読した。」そして「愛のため、十字架に打ち付けられたイエス」から自らの精神的苦痛を耐えて「同類人」の靈魂を救うことを学び、「私の人類に対する愛は私を励まして、力を与え一切に抵抗させる。」と述べている。<sup>3)</sup> イエスの無私の犠牲の精神は巴金を感動させたのだ。彼は中編小説『電』（良友出版社 1935）の中で『聖書』を多く引用して博愛の思想を謳歌した。三部作の長編小説『火』（開明書店 1940-1945）では無政府主義者とキリスト教信者との信仰の争いを描いている。

曹禺は冰心のように洗礼を受けたことがなく、老舍のように教会の牧師をしたこともないが、キリスト教の影響は極めて顕著である。

この点については埼玉大学の牧陽一氏の「キリスト教的悲劇としての曹禺の『雷雨』『日の出』『原野』について」という論文がある。<sup>4)</sup>

牧氏は曹禺の初期代表作『雷雨』『日の出』『原野』とキリスト教の関連について、曹禺がキリスト教の影響を受けるに至った生活環境等という角度から詳しく分析している。牧氏は『雷雨』『日の出』『原野』は題材、表現上の手法を異にしつつ、キリスト教的罪の意識という尺度を用いれば、一人の作家による一定の思想の表出に他ならないのではないかと。曹禺はこの第一期作品群の中で、単に西洋近代演劇の手法の摂取とその中国化を行ったのではなく、その思惟の基盤にあるキリスト教的罪の意識をも自らのものとしていった。そして曹禺はキリスト教の中に悲劇創作上のよりところをみだし、「原罪」「終末への待望」という従来中国に於いては受容しきれなかった観念をその作品中に表現した。」と述べている。<sup>5)</sup>

作家の創作動機は家庭生活と切り離せない。しかしながら「時代・環境」を作品の決定要因とみなす社会学的批評も肯定すべきだろう。

1910年、中国北方の大都会天津に誕生した曹禺はキリスト教文化に大きな影響を受けた。

1858年6月、英、仏、口、米四カ国が清朝政府と「天津条約」<sup>6)</sup>という不平等条約を締結した後、天津は中国の対外通商の重要な港となり、門戸を開放したことによって、西洋文化も流入した。1860年、フランスの伝教士はまず天津の望海楼にキリスト教会を創設した。しかし、西洋のキリスト教は最初、四千年の歴史をもつ中国の伝統文化に強く排除された。1870年6月21日に爆発した「天津教案」<sup>7)</sup>事件は実際のところ伝統文化と現代文化との戦いであった。20世紀初めになるとキリスト教文化は天津で非常に重要な地位を占めるようになった。

曹禺は幼い時から伝統文化による高度な教育を受けたが、キリスト教にも強い関心を持っていた。曹禺は生後まもなく、天津のイタリア租界二馬路三十六号に転居した。近くにフランス教会があり、継母にそこのミサに連れていかれた事もあった。

私は『聖書』に触れるのが比較的早かった。小さい時、よく教会に行った。一体どういう意味があるのか私自身にも分からなかった。人間は一体どのように生きたら良いか？何のために生きているか？どんな人生の道を歩んだら良いのか？その時、教会に行ったのも人生の問題の探索と解決のためだったのだろう。当時、私は比較的時間に余裕があり、宗教に興味を持ったが、ただ仏教には興味がなかった。多分仏教はあまりにも浮世を悟り過ぎるからだろう。かつて父と一緒に仏典を読んだことがあるが、どうしても頭に入らなかった。ほかの宗教に私は好奇心を持った。<sup>8)</sup>

南開大学から、濃厚な西洋文化の雰囲気にも包まれる清華大学外国語学部欧米文学科に転学した後、曹禺はキリスト教文化に夢中になった。当時彼は『聖書』を研究しただけでなく、バッハの宗教音楽『B小調ミサ曲』などに興味を持っていた。清華大学の講堂の前に来る

と、思わず小さい時よく通っていた天津のフランス教会を思い出した。（『曹禺伝』pp.122-123）

清華大学の時代に私はバッハらの宗教音楽にも触れたことがある。私はトルストイの『復活』を読んだ後、非常に復活祭（イースター）がどんなものか見たくなかったし、ミサの儀式も見たいと思った。<sup>9)</sup>

清華大学を卒業して、社会に出て初めてついた仕事は天津河北女子師範学院外語系の教授だった。『日の出』の初めに『聖書』の一部を引用したことについて曹禺はこう述べている。

私はなぜこのように『聖書』の言葉を引用したのか？私はかつて『聖書』文学を教えた。英語で教えたのである。それは天津河北女子師範学院にいる時だった。私は『聖書』文学についてはそれほど詳しくはないが、中には多く非常にきれいな文章と物語がある。<sup>10)</sup>

曹禺はそれまで知らなかったことについての答えを『聖書』の中から見つけた。つまり彼は一つのイメージから出発して、一つの世界を発見し、芸術家としてそこで活きたいという願望を持つようになった。特にキリスト教の「善」と「悪」の倫理道徳観は曹禺の美学思想に対して目に見えない感化作用を及ぼしたと言えよう。

西洋的精神を持った曹禺はキリスト教的人道主義者である。曹禺は「私は人間を書くのが好きだ。私は人間を愛している。（中略）人間は非常に理解を必要とするが、非常に理解しにくいものだと感じている。」と述べている。<sup>11)</sup>

注目に値するのは、『雷雨・序』の中で曹禺が繰り返して「原始的生命」を強調していることである。周樸園という人物を中心に展開する周、魯両家の錯綜した血縁関係は巨大で恐ろしい運命の縄だと言える。周樸園と侍萍の三十年前の罪が『雷雨』の悲劇の源となった。

周樸園は『聖書』のいわゆる「原罪」を体現する人物である。

「原罪」はキリスト教の根本的教理の一つである。人間の始祖アダムが犯した罪が、子孫である人間の全体におよぶとする説である。この教理はイエスの教えにはほとんど見出されないが、使徒パウロによって初めて取り上げられた。アダムから遺伝された罪、つまり両親の性交が罪の遺伝の機会と考えられた。

『雷雨』の序幕は教会の場面と設定されている。ベルの音とともに曹禺が馴染深いバッハのミサ曲がオルガンの演奏によって聞こえてくる。エピローグも同じ教会の場面である。一頻りの静寂と沈黙。十字架を掛けた修道女が『聖書』を読む声が幕切れとなる。

稲妻、雷鳴、雷雨、死亡等の恐ろしい悲劇が発生した後、和やかな教会に場面が転換するという曹禺の「配慮」が『雷雨』の緊張した雰囲気をもたらし「観客の情緒を更に広い沈思の海に導いて行く」（『雷雨・序』）。これは明らかに罪を犯した人間が宗教的和解を得たのである。『雷雨』が創作面においてアリストテレスの悲劇の原則に忠実に従っていることについて

では拙論「『雷雨』における『詩学』の影響<sup>12)</sup>」に述べたように、人間が運命との戦いの中で許されない罪を犯せば、神による罰から逃れようとしても逃れられず、不可思議な運命に操られて、不可避免的に破局を迎えるという構成はキリスト教の影響を受けたものと考えられる。特にキリスト教的な「終末への待望」の主旨によく合致している点は注目すべきである。

『雷雨』の中で欠かせない「人物」である「雷」は作家のキリスト教思想の発露でもあると思う。周、魯両家の間の罪悪すべてを「雷」という神は見ている。雷鳴は神による正義の怒りであると感じていいだろう。飯塚容氏は『原野』をオストロフスキー (1823-1886) の『嵐』(1860) と比較する論文の中で、「雷」についてこう述べている。

この老婆とともにカテーリナを追いつめるのは「雷」である。罪の意識におびえる彼女は、「雷」をことの外恐ろしがらる。夫と姑にボリースの名を告げるのも、雷の鳴った瞬間である。「雷」は天意を代行するものとしてカテーリナに迫ってくるのである。このような「雷」の使い方は、曹禺の『雷雨』に通じるであろう。『雷雨』の四鳳はやはり「雷」を恐れ、「雷」に誓いを立てる。そしてその誓いを破った報いでもあるかのように、悲惨な死をとげる<sup>13)</sup>

『雷雨』の結末は「ハッピーエンド」ではなく、非常に残酷な結末になった。劇中の人物はほとんどが地獄に陥った。侍萍と繁漪は発狂した。罪のない四鳳と周冲は悲惨な死をとげた。周萍は自殺した。しかし周樸園という悲劇の「原罪」だけは生き残っている。「人祖の墮罪史」(創世記 3.1-24)によれば、人間は、神のことばにそむき、神への奉仕という人間本来の使命に違反したことによって罪に陥った。しかし神は人間を、その墮罪の状態にまかせておくことなく、人間が罪を犯した後も、人間に近づいた。(中略)人間は罪を犯した場合、いつも、自分自身の責任を振り捨てて神から逃れることはできない。(中略)救世史上神は幾度となくイスラエルに近づき、語りかけ、彼らに自身の責任を自覚させようとした<sup>14)</sup>

『聖書』のこの思想に従って、曹禺は周樸園に「悪」から「善」へ転化する道を開いた。まず周樸園は、周の屋敷を教会に寄付して、病院にした。それから、十年の歳月をかけて侍萍の記憶を呼び戻すため、彼の罪で行方知れずになった魯大海を捜す。二人の狂った妻に彼は僧尼の『聖書』の朗読を聞かせる。周樸園は心から懺悔していた。罪の深淵から「人間に近づいた」のである。これについて曹禺はこう述べている。

「『雷雨』が作者の宿命観を表していると言われる。これは間違っている。周樸園は宿命論或いは「天意」という思想を持っているかも知れない。これは珍しいことではない。(中略)『雷雨』の描いたような特定の環境の中で、登場人物は天意の思想を持っているのが自然なことである。<sup>15)</sup>」

『雷雨』に比べれば、『日の出』は更に現実生活に近づいている。「上流社会」の墮落と「下層社会」の不幸の暴露がより徹底している。

曹禺はこの作品の初めに老子の『道德経』と『聖書』の一部を引用している。又、その排列の順序について繰り返し説明を加える。この引用と排列の順序、作家の動機について私はこう考える。

まず、『道德経』七十七章にはこうある。

「天の道それなお弓を張るときか！

高き者これを抑え、低きものを挙げ。

余りある者これを損い、足らざる者これを補う。

天の道余りあるを損い、斯うして足らざるを補う。

人の道すなわち然らず、足らざるを損い以て余りあるに奉ず。」

ここで曹禺はまずテーマの概念を明確にしている。「人の道」は「天の道」に背いているという不合理な現実を暴露する。ここには作家の暗く醜い現実に対する不満も含まれる。

次に『新約聖書』と『旧約聖書』の引用も極めて深い象徴的意味をもっている。

『新約聖書』ロマ書第一章のいわゆる「不義」「悪徳」「貪婪」「嫉妬」「虐殺」「闘争」「冷酷」等、『日の出』は奇怪な様相を呈する三十年代中国の都市文明にゆがめられた醜悪な生活の縮図である。『日の出』はこのような社会を舞台背景とする。ホテルの陳白露の豪華な部屋はいわゆる上流階層の会合の場所となる。そこには虚偽、醜悪が充ちている。一方、三流の女郎屋（第三幕）は淫靡、混乱、貧困、悲鳴に充ちた下層社会である。

『新約』の「コリント人への手紙」(一)にはこうある。「兄弟よ、我らの主イエス・キリストの名に頼りて汝らに勧む、おのおの語るところを同じゅうし、分争することなく同じ心、同じ念にてまったく一つになるべし。」

また『新約』の「テサロニケ人への手紙」(一)にはこうある。「兄弟よ、我ら主イエス・キリストの名によりて汝らに命ず。我らより受けし伝えに従わずして妄りに歩むすべての兄弟に遠ざかれ。(中略)我らは汝らのうちにありて妄りなることをせず、価なしに人のパンを食せず、却って汝らのうち一人をも累わさざらんために労と苦難とをもて、夜昼働けり。(中略)人もし働くことを欲せずば、食すべからずと命じたりき。」<sup>16)</sup>

『日の出』の「よいとまけの唄」の歌詞「日出東来、満天の大紅！要得吃飯、可得做工！」(第二幕)はこうした『聖書』における神聖の思想によく合致していると思う。つまり全くキリスト教の影響下にあるのだ。ところが、長期にわたってこの「唄」のテーマは、労働者の明るい未来への憧れであり、そして「その勇ましい歌声と方達生の熱情に対する賛美は観客に明るい希望をもたらす。」<sup>17)</sup>と論じられてきたが、これは曹禺の創作意図を見誤った解釈と言えるであろう。

次に『旧約聖書・預言』の「エレミア記」にはこうある。「ああ、我が腸よ、我が腸よ、痛苦心の底におよび、我が心胸轟く。我黙しがたし。我が靈魂よ、汝菰の声と軍の関を聞く

なり。敗滅に敗滅の報知あり。この地はみな荒らされ、我が幕屋は頃刻に破られ、我が幕はたちまち破られたり。我が旗を見、菰の声を聞くはいつまでぞや。(中略)我地を見るに形なくして空しくあり。天を仰ぐにそこに光りなし。我山を見るに皆震え、またすべての丘も動けり。我見るに人あることなし。天空の鳥も皆飛び去れり。我見るに肥美なる地は砂漠となり、かつすべてのまちはエホバの前に、その烈しき怒りの前に毀たれたり」<sup>18)</sup>。

「我また新しき天と新しき地とを見たり。これさきの天とさきの地とは過ぎ去り、海もまたなきなり」<sup>19)</sup>。この「終末」の暗黒は『日の出』の中にも充分現れている。神の正義はすべての邪悪な社会秩序を暗黒とともに滅亡させてしまう。当時の社会機構の腐敗、陳白露の自殺、黄省三の失業、小東西の悲惨な死、潘月亭の破産、張ジョージと顧八奶奶の無恥等はキリスト教的な世界の「終末」を象徴している。「『日の出』に於いて曹禺は様々な矛盾、腐敗を内包した全世界の崩壊と新生を求めていた」<sup>20)</sup>。これについて曹禺はこう述べている。

私は我慢できない。私はひとまずの陽光を渴望している。私は太陽をおそらく見ることができないだろうが、この一生のうちに大地に巨大な雷がとどろくのを見たいと思う。それはこの地に巢食っている魑魅魍魎どもを紛々に打ち砕く。それによって大陸が沈み海になっても構わない。(中略)「時日曷カ喪ワレン、予及ビ汝皆亡ブ！」(この太陽さえいつか亡びるのであろうか。私もおまえもみんな亡びてしまうのだ。)(『書経・商書湯誓』に見える)という言葉がいつも心を浮かぶ。暴風雨がやってくるという予感だ。私は周囲の不公平を激しく呪った。これらの腐敗した連中を取り除かなくては、目の前の光明を見ることもできないのだ。ちょうど『旧約聖書』で情熱的なエレミヤが「我地を見るに形なくして空しくあり。天を仰ぐにそこに光りなし。」私は大地震が来る前のような「いらいらして落着かない」気分になり目の前で地が崩れ、山が倒れ、「我見るに肥美なる地は砂漠となり、かつすべてのまちはエホバの前に、その烈しき怒りの前に毀たれたり」なのを見た。このような心情下、私はすでに「汝菰の声と軍の鬨を聞くなり」。私は何かを書いてこの憤懣を晴らしたかった。「おまえたちの最後の日が来たのだ！」と叫びたかった。荒んだ生活を送り恥を知らない、太陽を放棄した連中に向かって」<sup>21)</sup>

この部分に『日の出』に『聖書』を引用した意図がよく説明されていると思う。

『日の出』の中に現れる「暗黒」「自殺」「爆発」といったインスピレーションの暗示と非日常的な時空は曹禺の現実社会への呪いであり、それを瓦解させたいという祈りなのである。

次に『原野』について見よう。拙論「表現主義」から見た『原野』<sup>22)</sup>に述べたように『原野』は発表以来、時間と空間が飛躍する手法に西洋の表現主義の影響が見られるため、リアリズムの「天下」だった当時の中国文学界から強烈な批判を浴びざるをえなかった。それは結果的に、リアリズム批評の旧弊と硬直ぶりを露わにした。この劇作の社会的意義を、まっ

たく無視して純粋に芸術面だけで解釈していくのは困難である。しかし社会的意義を強調し過ぎるのも、また間違いであろう。

曹禺は『原野』のテーマは「憎しみ」と「復讐」であると述べている。これについて彼は四川人民出版社編集者蔣牧叢への手紙にこう書いている。

「『原野』は人間と人間の極端な愛と極端な憎しみの感情を語っている。若い作者（当時、私は二十六歳にすぎない。非常に単純だった。）の感情を叙述する詩である。その中にはそんなに多くの政治思想はなく、私は多くの歴史的事実と自身のいくらかの経験、見聞に基づいて書いたのである。多く今日の尺度でこの劇に制限を加えるべきではない。」（『曹禺伝』p.464）。これは『原野』に対する最も説得力のある解釈であろう。

『原野』においてはキリスト教のいわゆる善悪是非という道徳観念がとりわけ顕著である。罪惡の恐怖によって人々は博愛を知る。ここで再びキリスト教のいわゆる「原罪」について触れたい。『原野』の「原罪」は焦閻王である。彼は親友を裏切って仇虎の家を絶望の淵に落とした。彼は許せない罪を犯した。こういう意味からいうと仇虎の復讐は全く正義の反抗である。しかし仇虎が脱獄して故里に戻った時、焦閻王はすでに死んでいた。事態の変化が発生したが、性格が歪み理性を失った仇虎は心の中で善と悪の戦いを行い、結局「善」が「悪」に負けた。仇虎は復讐の念を捨てずに罪のない人を惨殺した。この「悪」で「悪」に報いやり方は原始的野性を示している。復讐の目的を果たしたあと、神の前で仇虎は次第に罪を自覚し懺悔を始めた。心の中に再び「善」と「悪」の戦いが始まった。最後に「善」は「悪」に勝った。罪のない人を殺害した仇虎は破滅に至る。自殺は仇虎にとって唯一の罪からの解脱の方法だと思う。『原野』の中で繰り返し「理想的な天国」が強調されているのは、キリスト教の善人が「天国」に昇り、悪人は「地獄」に落ちるという主旨だと考えられる。暗黒の世界から来た仇虎は理想的な天国——「黄金の敷きつめられた土地」に行けなくなり、地獄に落ちてしまうしかない。相手を破滅させると同時に自らも破滅に至るのである。これこそ神の懲罰である。神の天意に叛く人間が災厄に見舞われるという話は神話や聖書の中のいたるところに見出せる。

盲目の老婆焦氏も「悪」の代表者である。息子に対する異常な愛と嫁の焦花氏に対する嫉妬と虐待は神の「善意」に対する背きである。彼女は自分の手で最愛の孫を殺した。一人息子も失った。原始的な恐ろしい原野にこの盲目の老婆が一人だけ残されたのは神から報いだと言えよう。

作家の伝記的事実、実生活と作品との相互関係、作品の背後に隠された作者の意図、あるいは作者自身も知らない無意識の領域の解明などは文学研究における重要なテーマだと言える。

「テーマ」という語は一般に作家が意図した「主題」や意識的な「関心事」を指す。これは伝統的に批評家によって用いられてきた。しかし批評家たちは、作家の意識の奥深くに潜む新たな「テーマ」を暴き出そうとする。例えば、一人の作家が幼少年期の出来事や状況を無意識のうちに作品の中に取り入れたものを「テーマ」と呼んでいる。曹禺の場合もそうである。

曹禺は偉大な劇作家であったが、その本質は苦痛に満ちた孤独な劇作家であったと言える。

『雷雨』のテーマは、人生の罪と罰を表現すること、そして『日の出』は暗い現実社会の罪を暴露することだとすれば、『原野』は「悪」で「悪」に対抗する理性を失った人間の自己破滅の悲劇を通してキリスト教の「愛」と「善」の教えを提唱することだと言える。これが曹禺の初期劇作において無意識に作り上げられていたテーマなのである。芸術的魅力に満ちた三大悲劇によって曹禺は天才的個性と独創的才能を認められ、注目をあつめる劇作家となった。

拙論は宗教学的批評と社会学的批評の兼用である。一つの文学作品は読み手の立場、解釈の方法、分析の手段によってさまざまな読み方が可能であると思う。恐らくは作家も創作時に意図しなかったところが評論家の洞察によって論じられ、分析される。作品の新たな魅力を発掘することも可能になる。私の作業はかならずしも説得的妥当性を持ち、そして斬新な解釈になっているとは言えないと思うが、いずれにして拙論の意図は作家の無意識の領域にまで踏み込んで、従来曹禺研究を乗り越えようとするところにある。新しい曹禺批評への道を開き、曹禺研究の隆盛につながることが祈念している。

## 注と文献

1. 『冰心文集』第6巻、上海文芸出版社1993、pp.219、222
2. 老舍「霊的文学和仏教」『中国現代文学研究叢刊』1985年第2期 p.207
3. 巴金「写作生活底回顧」1936.2『巴金專集』所収。江蘇人民出版社1981.7、p.262
4. 牧陽一「キリスト教的悲劇としての曹禺の『雷雨』『日の出』『原野』について」『日本中国学会報』第42集
5. 同上 p.255
6. 「天津条約」：アロー戦争中、1858年6月、英仏連合軍占領下の天津で締結された清露、清米、清英、清仏間の四条約。これらの条約で清国は外国使節の北京常駐、外国人の内地旅行権を承認し、国内のキリスト教信者および伝道者に対する保護を約す。
7. 「天津教案」：清末1870年6月、天津住民のフランス・カトリック教会襲撃事件。この事件は当時全国に広がっていたキリスト教排斥運動の影響によるものであったが、直接の原因はフランス教会経営の孤児院に対する児童誘拐の疑惑にあった。これに対する清仏両国当事者の処置が悪かったため、一層民衆の疑惑を深め、排外派の煽動も加わって暴動に発展し、フランス領事はじめ、中国人のキリスト教・商人など外人20余名、中国人のキリス



ト教信者 50 余名が惨殺された。

8. 曹禺「我的生活和創作道路——同田本相的談話」『戲劇論叢』1981 年第 2 期。引用は『曹禺論創作』上海文芸出版社 1986、p.138-39
9. 同上 p.139
10. 同上 p.138
11. 『曹禺論創作・序』上海文芸出版社 1986、p.5
12. 姜小凌「『雷雨』における『詩学』の影響」『現代中国』（日本現代中国学会誌）1997 年 7 月第 71 号 pp.181-190
13. 飯塚容「『原野』と外国文学・再論」『季節』第 10 期 p.33
14. 『聖書の根本思想』第三部「人間・六“罪”」J.アプリ著、中央新書 9 中央出版社昭和 47 年 6 月 pp.216-217
15. 同注 8、p.137
16. 『聖書』世界古典文学全集五、筑摩書房、関根正雄、木下順治編、昭和 40 年 8 月 pp.443-444、450
17. 陳瘦竹、陳蔚徳：「論『雷雨』和『日出』的結構芸術」、『文学評論』1960 第 5 期。引用は『曹禺研究資料・下』（田本相・胡叔和編 中国戲劇出版社 1991、p.861）による。
18. 同注 16『旧約聖書・預言』p.201
19. 同注 16『新約聖書・ヨネハ黙示録』四）「新しいエルサレムの幻」p.510
20. 同注 4、p.252
21. 『日の出・跋』、『曹禺全集・上』p.382
22. 姜小凌「表現主義に見た『原野』」『中国研究月報』602 号、日本中国研究所 1998 年 4 月 pp.10-20